

わくわくシアター

県民カレッジ高岡地区センター

各回とも 13時30分 上映開始

11月20日(日) 12月18日(日)

◆いwasakiちひろ ◆日本を変えた女性たち

～27歳の旅立ち～ 「猿橋勝子 女性科学者のパイオニア」
(96分) (20分)



1月15日(日)

◆言葉の彼方に 作家が語る富山の文学

「作家の原風景～文学の原点～(宮本輝)」(28分)

◆ふるさとに謡あいて ～富山の民謡～

6 「生業と民謡」(25分)

◆風雪を刻んで～富山の住まいと暮らし～

「住まいのあゆみとこれから」
(29分)



◆BBC世界の建築遺産
華麗なる建物たち
(50分)

2月19日(日)

◆HAZAN
(108分)



会場
申込方法
お願い

県民カレッジ高岡地区センター学習室(ウイング・ウイング高岡7階)
事前予約不要。当日、会場前で受付します。各回先着30名、入場無料。
入場前の検温と名簿作成にご協力いただいた方に、入場券を発行します。
発熱、咳などの風邪症状がみられる方はご来場をお控えください。
マスクの持参と着用、入場前には手指消毒をお願いします。
会場内での会話はできる限りお控えください。
会場内での飲食は禁止です。ただし、水分補給は可能です。
座席間は一定の距離(1m以上)を確保します。
上映中も会場内の換気をします。(換気扇ON、窓や出入口の開放など)

感染予防対策

入場無料
先着30名

11月～2月上映内容 【高岡】

<p>11月 20日 (日)</p>	<p>■いわさきちひろ ～27歳の旅立ち～ (96分) 日本を代表する絵本画家いわさきちひろ。ちひろの絵は没後40年近く経った今も愛され続けているが彼女自身の人生については、あまり知られていない。不幸な形で夫と死別。戦争で家は焼き払われ、何もかも失った人生のドン底。大恋愛の末の再婚、失業中の夫を支えた過酷な日々、病に倒れ、命を削りながら平和への想いを絵筆に込めた最期まで、どんな時も決して諦めなかった、いわさきちひろのドキュメンタリー。(2012年)</p>
<p>12月 18日 (日)</p>	<p>■日本を変えた女性たち「猿橋勝子 女性科学者のパイオニア」 (20分) 女子の進学率が低かった時代、学問の夢を一度は断念して就職した後、帝国女子理学専門学校に進学。軍国主義が支配的な中で基礎研究の道に進む。1954年太平洋ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験がもたらした放射性降下物質“死の灰”の分析で世界的に評価された。退職後、“女性科学者に明るい未来の会”を設立し、毎年女性科学者1名を表彰する猿橋賞を通じて女性科学者を支援。日本の女性科学者に活躍の道を切り開いた猿橋勝子を紹介。(2018年)</p> <p>■BBC 世界の建築遺産 華麗なる建物たち (50分) 建築史学者ダン・クルックシャンが、世界の素晴らしい建築物・都市を巡り、時代や文化を越えて人々を魅了し続ける建築の真実に迫る作品。(2003年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆タージマハルホテル (インド) ◆ノイシュヴァンシュタイン城 (ドイツ) ◆アマゾナス劇場 (ブラジル) ◆ヴィラ・バルバオ (イタリア)
<p>1月 15日 (日)</p>	<p>■言葉の彼方に 作家が語る富山の文学 「作家の原風景～文学の原点～(宮本輝)」 (28分) 富山には太古からの自然や文化のもと、千年を超える文学の歴史がある。この豊かな文学風土を背景に、人々や自然はどのように描かれてきたか。その言葉に潜む思いはどのようなものか。小学生時代を富山で過ごした宮本輝氏にお話をうかがうとともに、作品朗読や映像を織り交ぜて紹介。(2003年)</p> <p>■ふるさとに謡ありて ～富山の民謡～「生業と民謡」 (25分) 山と川、村と水田。温暖な日本の気候風土の中で人々は自然の恵みを受けながら様々な生業を営み、その営みの中から唄を生み出してきた。立山町目桑の「目桑ちりめん節」や高岡市金屋の「やがえふ」など県内に伝承されてきた民謡や仕事唄を紹介。(2001年)</p> <p>■風雪を刻んで～ 富山の住まいと暮らし～「住まいの歩みとこれから」 (29分) 富山の住まい、建築と人々の暮らしとの関わりを、建築学的な部分を交えながら、その地域に立脚し、培われてきた文化・風土を掘り起こし、これから私たちが大切にしていけるべき住まいや景観、街づくりへと考えを深めるとともに、ふるさと富山の素晴らしさを再発見していく。(1999年)</p>
<p>2月 19日 (日)</p>	<p>■HAZAN (108分) 板谷波山(榎本孝明)は、岡倉天心(益岡徹)に思想的影響を受け、幼い頃に見た美しい陶磁器を自らの手で作ってみたいと強く思うようになる。そして教職を辞した彼は、東京に小さな新居を構え、創作活動を始める。一方妻のまる(南果歩)は金策に資材調達にと苦勞の連続。しかし自身の作を批判されても、家計が逼迫しても波山は自分を信じ続ける。やがて、その研究の集大成となる「葆光釉(ホコウユウ)」という釉薬を究める。そしてある日、波山の作品に魅せられたという若き実業家が波山の前に現れ……。 (2003年)</p>